



ヴァイオリン・レッスン・ルーム

# 巨匠の伝言

第45回

スル・ポンティ・チェロ  
イザイ：遠い過去



ヴァイオリニスト 木野 雅之  
日本フィルハーモニー交響楽団ソロ・コンサートマスター

URL : <http://www.netlaputa.ne.jp/~kinopizzu/>

## (スル・ポンティ・チェロの効果)

弓を使ってのいろいろな奏法は、曲を作り上げていく中で、表現力を増すだけでなく、とても楽しいものである。以前にもこのコーナーで書いたことがあるが、ヴァイオリンは、駒から指板の間をいろいろと駆使し音色を追求していくことによって様々な音を作ることができるのである。弓の角度、重さのかけ方、弓の位置、弓の量、あらゆる可能性を試すことによって演奏家としての個性を打ち出すことができる。

その一つ、駒のすぐそばを弾く奏法、スル・ポンティ・チェロは曲の中で作曲者自身が指定し、奏する技術の一つであるが、その使い方には幾通りかの種類があり、きちんとしたやり方を身につけないと音が出ないばかりか非常に弓がぶれるので弾きにくい。駒の近くは、通常、

弾く場所よりも弦が固く、弓の反発が大きい。弓をしっかりと持つのはもちろんのことだが、大切なのは、弓を少し手前に倒しつつ、真っ直ぐ運ぶことによって、揺れを防ぐことである。

スル・ポンティ・チェロは、基本的には、駒のすぐ向こう側を弾くのであるが、極希にはあるが、駒の上を直接、弾く種類のものもあり、こちらは非常に難しい。実際にやってみると一番よくわかると思うのだが、弓を置くときのコントロールに細心の注意が必要であり、まずは少ない弓の量から練習を始めること。自分の出している音にムラがないかどうかよく聴くこと。

こうしてうまく使えるようになると、曲の中でいろいろと試してみたいくなるであろう。是非、研究してみてください。

## イザイ Eugène Ysaÿe (1858～1931) ベルギー 遠い過去 Lointain Passé Op.11

1853年の初め、53歳のブリュッセル音楽院教授、アンリ・ヴュータンがリエージュの町を歩いているとき、一軒の家から彼の「協奏曲第4番」の素晴らしい演奏が聞こえてきた。彼は思わずその家のドアをノックしていたが、これが当時15歳のイザイと生涯の師ヴュータンとの出会いであった。

彼は初見や暗譜の優れた持ち主で、たくさんの弟子を育てたが、後に設けられたイザイ国際コンクールは、現在のエリザベート国際コンクールである。

3つのマズルカの中の1つ「遠い過去」は、その中では最も人気の高い曲である。郷愁を思い起こさせるセンチメンタルなメロディーが美しい曲である。